

2022年2月1日発行(隔月刊1日発行)

特集 人に寄り添う左官とタイル

N°183

2022 February

隔月刊 コンフォルト インテリアの心地よさをつくる

CONFORT

リナ・ゴットメ——ベイルート、土の記憶

静かな土壁の家 堀部安嗣×長田幸司

左官という情熱 三宅洋児 都倉達弥

フランスで加速する土建築のムーブメント
ジョリー&ロアレ建築事務所

土とタイルが結ぶ空間
大西麻貴+百田有希 栗原季佐 芦沢啓治

オーダータイルの新時代
TAJIMI CUSTOM TILES LIXILやきもの工房 TILE made

自然素材の左官材
タイル取扱い会社リスト2022

保存版 名称統一からの
日本タイル100年史 後藤泰男

特集
人に寄り添う
左官とタイル



Life Together with
Plaster and Tiles

Dummy Dummy Dummy Dummy



リナ・ゴットメ

ベイルート、土の記憶

レバノン・ベイルートで生まれ育った建築家、リナ・ゴットメ。

集合住宅「Stone Garden」は、彼女のこの都市のイメージを具現化した建築だ。

世界中で報道された2020年8月の大規模な爆発での被害を乗り越えて、
いまもベイルートの人々の暮らしを包んでいる。

Stone Garden (Beirut, Lebanon)

Design: Lina Ghotmeh / Lina Ghotmeh — Architecture

取材・文 / 川上純子 写真 / Laurian Ghinitoui (特記をのぞく)

ストーンガーデンは、ベイルートの中心街と昔からの職人街と市の中心部に隣接する港湾工業地区に立ち、一昨年の爆発事故の爆心からは1kmほど距離がある。躯体は無傷だったが、爆風で窓ガラスが割れ、室内に被害が及んだ。写真左手前のビルの曲がりくねった鉄骨が、事故の凄まじさを物語る。



ていねいに耕された畑の畝のように
土壁に刻まれたスクラッチ模様

ファサードは、職人たちが土を塗り、楕円したスクラッチ模様
に覆われている。建版に携わ
った職人の中には、内戦から逃
れてきたシリアの難民もい
る。手で作ることは、彼らの
思いを刻み、記録/記憶するこ
とでもある、とゴットメさんは
言う。写真: Takuji Shimmura



左/スクラッチの模様を検討するためたくさんのサンプルをつくったが、手作業となればサンプル通りはいかない。「結局、重要なのはスクラッチをつくる脚をデザインすることだったんです」とゴットメさん。右/手作業だから一気に全体を仕上げることは不可能だ。恐ろしく手間と時間のかかる方法だが、だからこそ地元の人と彼らが暮らす街に建築がしっかりと根づいていく。2点写真:LGA

歴史を記憶し、自然を取り戻すこと

ストーンガーデンは、パリを拠点に世界各地で活躍するレバノン出身の建築家リナ・ゴットメさんが故郷ベイルートで完成させた初のプロジェクトだ。始まりは10年以上前に遡る。ゴットメさんはパリで同郷の著名な写真家フアウド・エル・コウリー氏と知り合った。1991年、コウリー氏はロバート・フランクやジョセフ・クーデルカらとともに内戦終了直後のベイルートを撮影し、翌年写真集『Beirut City Center』を出版している。

写真集がとらえた光景は、80年生まれのゴットメさんが子ども時代に目にしてきた街の姿だ。「戦禍による荒廃と復興の中で育ったことが建築家を志すきっかけになった」と彼女は言う。建築は歴史の記憶と向き合い、傷ついた人びとを癒すのか。「記憶と建築」は彼女の宿命的なテーマだ。やがて、父でありモダンイズム建築家だった故ビール・エル・コウリーから土地を相続したコウリー氏が、ゴットメさんに再開設計画の設計を依頼した。敷地は工場が立ち並ぶ港湾地区にあり、昔からの職人町と市の中心街に隣接している。ベイルートでは近年再開発が進み、ガラス張りの高層ビルの建設ラッシュが進行中だが、過去を消し去る開発手法へは批判の声もある。

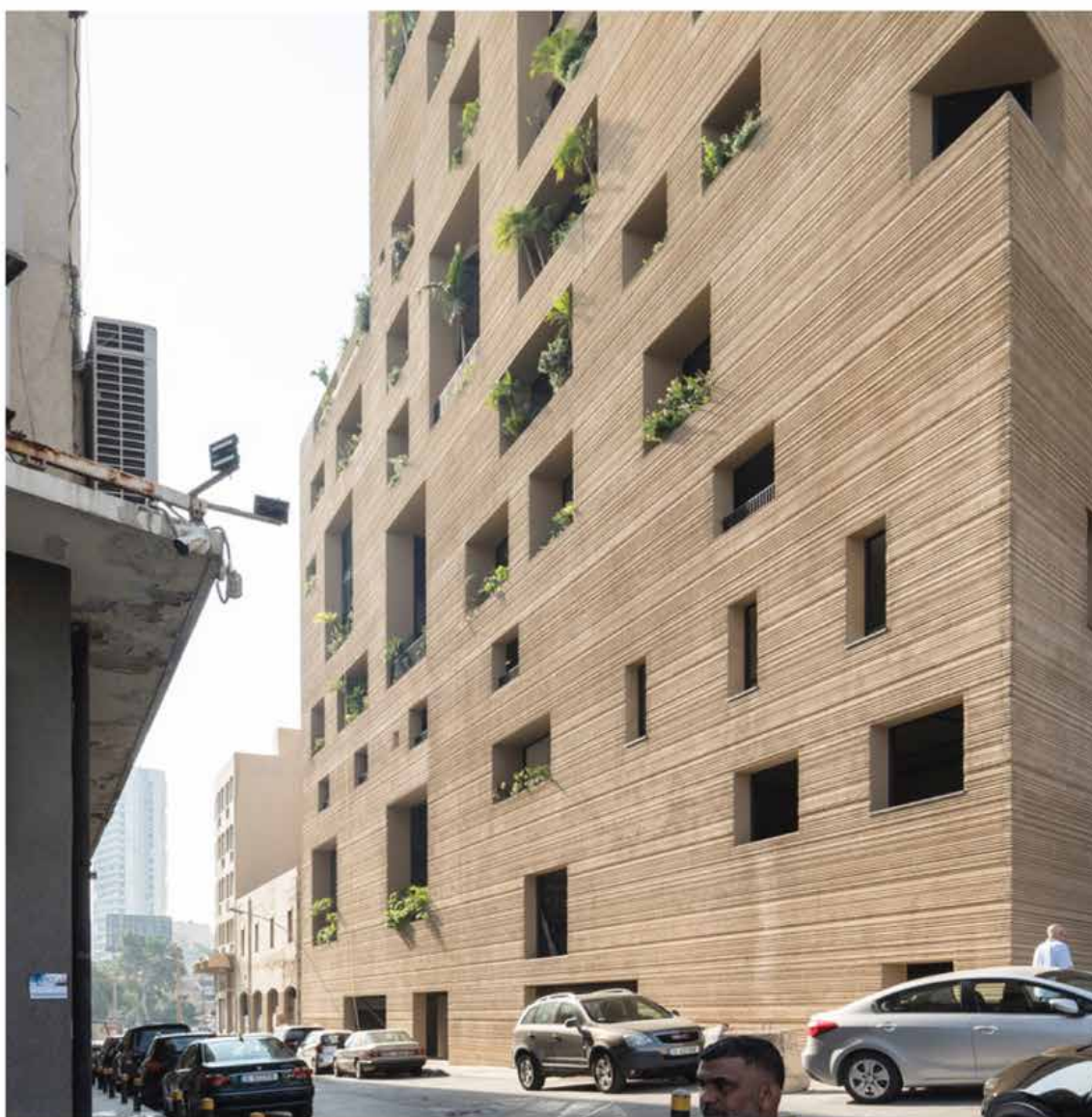
「歴史を記憶し、自然を取り戻すこと」は計画の重要な目標になった。ストーンガーデンはあちこちに草の生えた岩のようだった。「大地から立ち現れたような建築にしたかった」とゴットメさんは言う。不整形な形は市の建築規制に従って導き出した。子ども時代、爆撃や銃弾の痕の孔や凹みからたかましく生えてくる草木に癒やされ、力をもたらすことを思い出し、ランドムに開口をつくって植栽を配置した。地震の多い地域であるため、耐震性を求めてRC造としたが、外観は中東の伝統的な建築を参照し、スクラッチ模様のある土壁をまわして街になじませた。職人たちが土、セメント、繊維、防水材を混ぜた材料を塗り、ゴットメさんがデザインした大きな櫛で模様をつけた。プレキャストボードを現場で組み立てるほうが効率的に思えるが、「建築をこの場所のものにするには、みんなで作るプロセスが不可欠だった」と彼女は言う。実際、職人たちが作業を心から楽しんでいて、「こんな方法はどうかな、とアイデアを出してくれることもあって、とても嬉しかった。模様は種を蒔くための畝もイメージしていたが、この建築づくりもまさにここに種を蒔き、育む行為だった。同時に、岩のような姿はベイルートのシンボルで地中海に浮かぶ「鳩の岩」にも応答している。レバノンの文明は古く7000年以上前に遡り、ベイルートは紀元前から海洋交易の要衝として栄えてきた。鳩の岩はギリシャ神話にも登場する考古学的な場所であり、この地方の激しい地殻変動が作り出した地質学的景観でもある。

1階はコウリー氏とNPOが運営するアートセンターとして地域に開かれており、内装もゴットメさんが手がけた。2階以上の住戸は分譲され、アーティストやデザイナーを中心としたコミュニティが形成されている。竣工を間近に控えた一昨年8月、ここからわずか1キロの場所で大爆発事故が起きた。爆心地付近はクレーターのようにえぐられ、港湾地区一帯が甚大な被害を受けた。ストーンガーデンの被害は比較的軽く、窓ガラスが割れたものの、躯体はほぼ無傷だった。それでも、ちょうど市内に滞在していたゴットメさんは、悲惨な光景に身を引き裂かれるような思いがしたという。だが、事故の直後から被災者がここに身を寄せ、建築が癒やす力を発揮していた。詳しくはゴットメさんのエッセイ(13ページ)を読んでいただきたい。場所の記憶を汲み取り、形として立ち上げる建築という営みは「未来の考古学」だと彼女は言う。人びとが苦難を乗り越えるよすがとなるこの建築も、まさにその一例となっている。



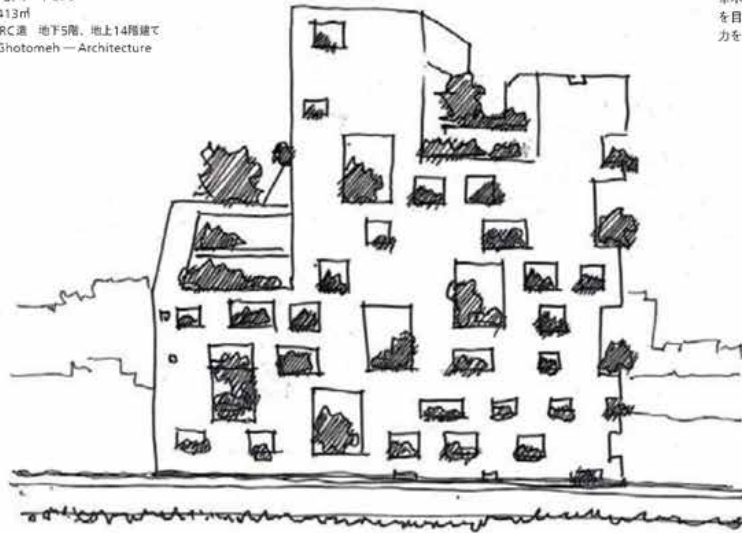
上／爆発後の外観。爆風は植物が置かれていなかった窓のガラスを吹き飛ばし、室内に被害を与えたが、植物があった部分は守られたという。左／道路に面した壁には、大きさの違う数多くの窓が設けられた。隣接する敷地での開発が見込まれる面は、通風孔など必要最低限の開口に絞っている。

大地から立ち現れた建築に宿る
生き生きとした植物の生命力

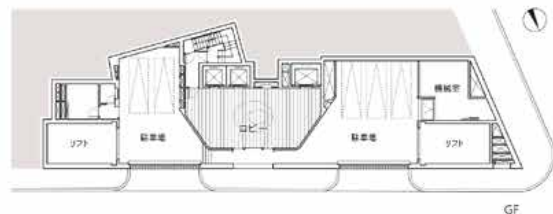
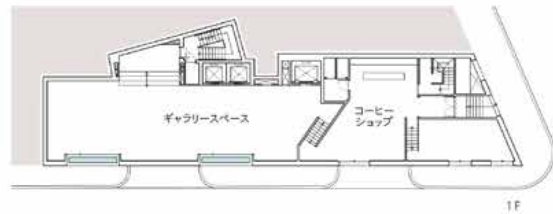
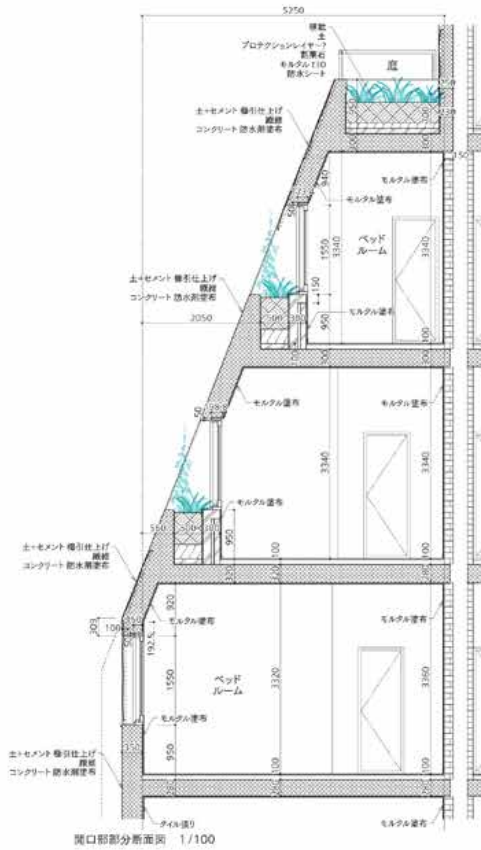


DATA
Stone Garden
 所在地 / レバノン・ベイルート
 用途 / 集合住宅、アートセンター
 敷地面積 / 6413㎡
 構造 / 規模 / RC造 地下5階、地上14階建て
 設計 / Lina Ghotmeh — Architecture

ゴットメさんによるストーンガーデンのスケッチ。窓からもりもりとはみ出すように配される草木は、戦争や災害からの復興を目指す人びとや街に癒やしと力を与える。提供: LGA



Lina Ghotmeh



平面図 1/500



爆発事故直後にストーンガーデンを訪れたゴットメさん。1kmの距離があっても、大きな窓ガラスが粉々なるほどの、激しい爆発だった。写真：Laurence Geai

We need beauty to survive

生き延びるために、私たちには美が必要だ

文 リナ・ゴットメ

2020年8月4日、18時になるころ、大爆発がベイイルートの街を襲い、港周辺の活気あふれる市街地を消し去ってしまった。191人が命を落とし、6500人以上が負傷し、30万人が住む場所を失い、数多くの歴史的建造物が灰燼と化し、これらの建物がささやくように伝えてきた歴史が沈黙に帰した。

ベイイルートは、国民の半分以上が貧困ラインを下回る未曾有の経済危機——世界的なコロナ禍でさらに状況は悪化した——の渦中にあった。そんな中で起こった爆発は、ベイイルートとその市民が抱いていた、まっとうな生活を生きたいというささやかな希望を打ち砕いてしまった。国中が混乱に陥った数カ月の間、不安な日々を送る人々を守るものはかろうじてシェルターがあるのみで、史上4番目の大きさを記録した爆発事故は、地上にいる人間すべてが持つはずの基本的な権利を奪ってしまった。レバノン人にとって、世界との連帯がこれほど大きな意味を持ったことはなかった。現地では、市民やNGOが友愛精神をもって——手段が非常に限られる中で——素晴らしい活動を行った。市民の力は、世界のメディアから称賛された。このような状況のなか、私たちからあれ、みなさんからであれ、支援はすべて何よりも貴いものだった。人間らしい温かい心に触れる一方で、この事故は、建築家という私の職業に深い問いを投げかけたものだった。「ストーンガーデン」は私が生まれ故郷で初めて手がけたプロジェクトだ。完成発表を間近に控えたときに爆発事故が起こったのは、皮肉な偶然だった。構想と設計に10年をかけ、建築への情熱はもちろん、私が育った都市への情熱のすべてを結晶化した作品だ。

爆心地である港からわずか1キロメートルに位置するこの建築を、ベイイルートの歴史を表現するもの、私自身奇妙にも慣れ親しんでしまった内戦後の荒廃した都市の風景への応答として、私は構想してきた。ガラスタワーが地中海の空に向かって驚い合うように建設されている中で、この建築は土の存在感を取り戻すものにならなければならないと思った。港のそばに静かに佇み、海からこの街を訪れる人々に手をふって迎えるような存在になっ

ていて考えて設計した。不整形の建築にしたいと考えて、建築規制に導かれる形を生かした。地面から立ち上がり、人の手がつくった彫刻のように癒しをもたらす存在となる。あるいは、だからこそ、私はこの建築に「未来の考古学」という洗礼を受けたのだ。大地のものとなり、大地に深く根を下ろしていく建築だ。周囲にある控えめな建物を優しく抱擁する建築だ。抉られ、むき出しになったベイイルートの都市の表皮を、植物と生命に満ちた喜びあふんだ地へと変容させていく建築だ。窓は、彫刻のような塊のあちこちに、踊るかのように非対称な位置に穿たれ、空中の高みで自然を育む。大きさの異なるこれらの窓が、建物の内側から、ベイイルートの眺めを写真のように切り取る——そのとき限りの瞬間、スナップショットであるかのように。そこへ、まさに瞬間的な速度の爆風が襲い、住人たちの暮らしを守るためにはめたガラスを吹き飛ばしてしまった。街中の鉄骨がぐにゃぐにゃのスクラップになって血に塗れたが、土でできたストーンガーデンは無傷だった。空中の高みに植えられた若い木々も、その場所にしつかりとどまっていた。ストーンガーデンは、人や物資を守る擁護に変貌した。職人たちが手がけた木工家具の破片、粉々に砕けた窓ガラスの一つ一つが、私の中で悲痛な声を響かせていた。私は苦痛に身を振らずにはいられなかった。自分の場所といるものは、私たちの身体とこれほど強く、理屈抜きで結びついているものなのか、と私は思った。もちろん私はこれまでも常に、自分のいる場所、自分がデザインし、つくり、建設する場所に対して、こうした愛着を感じてきた。しかし、今回は次元が違っていた……。

考えてみれば、この瞬間から、まさに考古学的実体の中で過去が未来に出会い、受胎した構想がものごとの始まりへと変容するという完全な物語のなかへ、私はさらに深く突き進んでいったのだ。そして私は、建築がもたらす回復力、人々の盾となり、この上なく壊滅的な状況において掩護となるその力に、魅了されていた。

翻訳 / 川上純子

Lina Ghotmeh リナ・ゴットメ
1980年レバノン・ベイイルート生まれ。ベイイルート・アメリカン大学で建築を学ぶ。アトリエ・ジャン・ヌーベル、フォスター・アンド・パートナーズ勤務後DGT ARCHITECTSを共同設立。16年エストニア国立博物館竣工後、Lina Ghotmeh—Architecture設立。

Lina Ghotmeh — Architecture
75.rue de la Fontaine au Roi, 75011 Paris, France
contact@linaghotmeh.com
https://www.linaghotmeh.com